

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民族誌的知見の形成と共有の場としてのフォーラム 型情報ミュージアム（コメント）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2016-10-05 キーワード: 作成者: 福岡, 正太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006106

民族誌的知見の形成と共有の場としてのフォーラム型 情報ミュージアム（コメント）

福岡 正太
国立民族学博物館

民族誌資料をめぐる2つの文脈——ソースコミュニティと博物館

私は、2週間ほど前にインドネシアのバリ島を訪れました。来年、新しくオープンする予定の民博の東南アジア展示のための収集を行うことが主な目的でした。収集したものの一つに、バロンと呼ばれる獅子があります。これはライオンに似た想像上の動物で、厄災や邪悪な力を払う力をもつと信じられ、村の寺院に大事に保管され、儀礼の際にその面と衣装をつけて踊ります。私は、バリ島で有名な仮面製作者に事前にバロンの製作を依頼していました。

ドライバーとして私を案内してくれた人物は踊り手であり、こうしたものについても詳しく知る人物でした。彼は、私が購入したバロンを見て、「これはすばらしいものだ。もし、バリ島で魂を入れる儀礼を行えば、非常に力をもったバロンになるだろう」と言いました。そして、「博物館に展示するなら、魂が入ってしまえば大変だ」とも言いました。そして彼はこんな話を私に聞かせてくれました。

昔、バリ島の芸能団がヨーロッパで公演しました。その時に使った仮面を、ある人が買い取り、ヨーロッパのある国で保管していたそうです。あるとき、再び、バリ島の芸能団がその場所を訪れました。すると、夜、誰もいないはずなのに声が聞こえたのだそうです。声の元を探ってみるとその仮面でした。その仮面はバリ島に返して欲しくて泣いていたのだそうです。芸能団の人々は事情を話してその仮面を引き取り、バリ島に持ち帰り寺院に納めました。

民族学博物館が所有する民族誌資料は、元々、ソースコミュニティにおいて、文化的に意味あるものとして機能していました。研究者による収集という行為は、その資料を当該社会における文脈から切り離し、博物館の所蔵資料としての文脈を与えることです。博物館には、他の多くの社会に由来する種々の資料が収集されており、それらの資料と共に民族誌資料は新たな意味を博物館において担うようになりました。

民博では、モノ資料を「標本資料」と呼んでいます。標本という用語は、恐らく英語であれば、「specimen」あるいは「sample」、「example」といった意味を示唆しています。この呼び名が示すように、博物館に所蔵された民族誌資料は、それらを作り出し、使用してきた人々の文化を表象するものとして位置づけられました。もちろん、ソースコミ

ユニティにおいて持っていた文化的な意味を踏まえてはいますが、ある時期まで、博物館においては、そうした文化的役割をすでに失ったものとして扱われてきました。

今日、私たちフォーラム型情報ミュージアムの構築に参考となるようないくつかの事例について学びました。そのいずれもが、博物館に収蔵された民族誌資料を、再び、ソースコミュニティの文化的脈絡において、意味あるものとして位置づけていこうとする試みだと解釈することができると思います。いずれの事例においても、ソースコミュニティの人々が博物館の民族誌資料に自らの伝統を学ぼうとする強い意志と、博物館が民族誌資料に新たに文化的意味を持たせようとする努力が結びついた結果だと私はみなしています。

民博には、世界中から収集された多様な資料が収められています。これらを博物館の標本資料として適切に保管していくことは私たちの重要な使命です。それに加えて、今日の事例に学び、文化的な意味を担うものとしての生命を与えるために、私たちはどのような仕組みを構築すべきかを考える必要があります。

発見の場としてのフォーラム型情報ミュージアム

私は、ここ数年、映像による芸能の民族誌のあり方について検討するプロジェクトを進めてきました。その中でわかってきたことの一つは、背景を異にする人は、同じ映像に別のものを見ているということです。例えば、その芸能を支えてきたコミュニティの人々は、誰が映っているかに注目する度合いが高いです。それに対して、芸能の研究者は、芸能を含む儀礼などの構成や芸能の振り付け、歌詞などに注目する度合いが高いと思います。恐らく、周辺地域の関連芸能などと比較しながら見るためだと思います。

私は、鹿児島県の硫黄島という人口120名ほどの小さな島の芸能を、4～5年にわたって撮影してきました。去年は、たまたま、中心となる複数の演者の身内に不幸があったため、彼らは芸能に参加できませんでした。私たちが帰るとき、ある島の人、「今年の踊りはこれまでの中で一番出来が悪かった」と言いました。島の人なら、映像を見れば、即座にそこに誰がいて、誰がいないかを見て取ります。そして中心メンバーが欠けていることに気づき、その原因に思いあたるでしょう。

同じ映像を見ながら、島の人々と私たちは、それぞれ違うところに焦点を当てて見ていたことに気がつきました。この事実は、映像を通じて互いに相手が持っている知見について学ぶことができるということも意味しています。映像を見ながら島の人々に話を聞くことで、私たちはその上演に参加している人々一人一人がどのような人かを知ることができるでしょう。そして島の間人関係についても学ぶことができるはずで、一方、島の人々は私たちから、周辺地域の関連する芸能に関する知見を得ることもできます。つまり、同じ映像を見ながら対話を重ねることによって、それぞれがもつ知見や情報を

交換し、撮影された芸能についての理解を深めていくことができるのです。

博物館に収蔵された資料は、元々の文化的文脈から切り離されて収集されたものですが、新たに博物館で他の資料とともに世界の文化を表象する資料としての意味を持つようになりました。多くの人々の目にさらされるがゆえに、逆に様々な知見や情報を集める可能性ももっているのです。フォーラム型情報ミュージアムは、多くの人の知見を集め、交換することで、新たな知識を生み出していく仕組みとして整備されるのが望ましいと思います。

資料の歴史的経緯をとどめる

民博は、グローバリゼーションが広く深く進行した20世紀後半、他に類例のない規模で民族誌資料を収集した機関です。関係者にとって、多くの収集資料は、まだ鮮明な記憶をとめない、郷愁や喪失感など、強い情緒を引き起こす喚起力を持っています。これらの資料を、再び、ソースコミュニティの文脈においても意味あるものとし、多くの人々の知見を蓄積しながら新たな知識を紡ぎ出していくことが、私の考えるフォーラム型情報ミュージアムが目指しているものです。一方で、こうした形で資料情報を広く公開していくことは、資料が収蔵されるに至った歴史的経緯をも明らかにします。

民博は、1974年に創設され、多くの文化人類学者が世界中で収集をおこない、博物館を作り上げました。私は、民博の教員が、文化人類学の精神にのっとり、真摯な態度でソースコミュニティの人々との関係を築き、収集をおこなってきたと信じています。しかし、当時の日本は急速に経済的な成長を遂げた時期でもあり、そうした経済力を背景として民博が成立したということはありません。さらに、設立以後、館員が収集した資料のほかに、様々な経緯で民博に収蔵された資料があります。私たちは、そうした様々な収蔵品の歴史的経緯をも背負っています。

民博が所蔵する音楽関連の資料の中にももしろい資料があります。日本コロムビアというレコード・レーベルが20世紀前半に、朝鮮、台湾、中国向けに製作販売したレコードの関連資料です。これらのレコードは、日本の川崎にあった工場でプレスされたため、その金属製のレコード原盤が同社に残されていました。長い間忘れられていた原盤が廃棄されそうになったときに、同社のエンジニアがその資料の重要性に気付き、民博がそれらを所蔵するに至りました。

それらの製品レコードは、日本ではほとんど流通しませんでした。だからこそ、日本コロムビア社内でも忘れ去られていました。しかし、韓国や台湾の音楽の発展を知る上で、無視することはできない重要な資料です。これらの資料の研究により、録音設備や演奏者等の都合により、録音の多くが日本で行われ、ポピュラー音楽に関しては、日本人の作曲家、編曲家、演奏家が多数かかわっていたらしいことが徐々に分かっています。

音楽市場としては別々の市場を形成していたのですが、その違いの背後にそれぞれの地域の音楽や音楽家の結びつきがあったのです。

フォーラム型情報ミュージアムに蓄積されていくべき情報には、こうした資料の来歴やその歴史的背景の情報も含まれます。それは、私たちとソースコミュニティとの歴史的關係を踏まえた上で、様々な民族誌資料を現代に生かしていくことにもつながっていくのでしょ